

## 裸句構造理論と選択制限

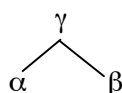
斎藤 衛

### 1. 序

★ 言語分析と言語学 ... Kuroda (1965, 1983) を参考として

★ 句構造規則から X' 理論へ、そして裸句構造理論へ

<併合による極端な過剰生成>



<日本語右方周縁部に関するケース・スタディー>

- A. モーダルの共起制限 (上田 2007) ... ~だろう、~まい、~な、\*~だろうまい、\*~だろうな
- B. 補文標識の階層性 (Saito 2012) ... ~のか、~かと、~のかと、\*~かの、\*~とか、\*~のと
- D. 談話的終助詞の分布 (遠藤 2010) ... ~わよ、~よね、~わよね、\*~よわ、\*~ねよ、\*~ねな

<補文標識の階層性と比較統語論>

- (1) 太郎は [CP 彼の妹が そこにいた (の) か (と)] みんなに尋ねた

Rizzi (1997) の左方周縁部構造

- (2) [CP Force [CP Topic\* [CP Focus [CP Topic\* [CP Finite ...] ...] ...] ...] ...]

<補文標識の分布に基づく補文の意味分析>

Frege (1892) の指示的不透明性

- (3) John believes that the Morning Star is the Evening Star

Montague (1973) 等による可能世界意味論と Davidson (1967, 1968-69) の論理形式

- (4) a. John opened the door with the key
- b.  $\exists e$  [opened (e) & by (e, John) & of (e, the door) & with (e, the key)]
- (5) a. Barbarella said that she is hungry
- b.  $\exists u$  [said (Barbarella, u) & SS (u, that)] [She is hungry]

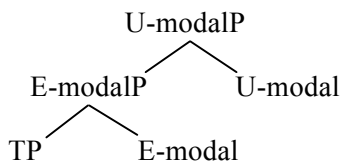
## 2. 右方周縁部要素の分布

### 2.1. モーダルの共起制限

<上田 (2007) による分類>

モーダル：モーダルの意味を表し、時制の接尾辞と結合しない要素  
(時制と結合：～かもしれない、～にちがいない、～べきだ)

- (6) a. E (認識) モーダル：だろう (推量)、でしょう (推量)、まい (否定推量)  
b. U (発話) モーダル：ろ/え (命令)、なさい (命令)、な (否定命令)、よう (勧誘)、  
ましよう (勧誘)、よう (意志)、まい (否定意志)



★ モーダルは、単文内に一つしか表れない。

- (7) a. \*君はそこに行くだろうな  
b. \*太郎はそこに行くまいだろう

<なぜ、このような共起制限があるのだろうか>

- (8) a. \*John should can go there  
b. John should be able to go there

- (9) a. \*John will must go there  
b. John will have to go there

★ 英語のモーダルは、独立形態素ではなく、時制の接尾辞と結合しなければならない。日本語の場合には、どのような説明がなされるのだろうか。

★ 意味的制約：すべてのモーダルは、命題を表す構成素を補部とする。

- (10)
- 
- ```

graph TD
    ModalP[ModalP] --> TP[TP]
    ModalP --> daroo
    TP --> v*P[v*P]
    TP --> ru
    v*P --> Hanako[花子が]
    v*P --> v*'
    v*' --> VP
    v*' --> v*
    VP --> Taoro[太郎を]
    VP --> taos
  
```
- (← 命題)
- ← 命題
- ← 命題
- (John saw [Mary push Bill])

p, □p, ◇p, □[◇p], ◇[□[◇p]], □[◇[□[◇p]]]

(11) 太郎は、そこに行くかもしれないだろう

<動詞接尾辞としてのモーダル>

★ 命令の「ろ/え」は、動詞語幹を形態的に選択する接辞であり、vP を補部としなければならない。  
(命令の「なさい」、勧誘の「よう、ましょう」、意志の「よう」も同様。)

(12) a. 太郎はそこに行け (ik + e)

b. 太郎はそれを食べろ (tabe + ro) ..... \*tabe + ru + ro, \*tabe + ru + daroo + ro

|                |              |
|----------------|--------------|
| cf. yom + anai | tabe + anai  |
| yom + imasu    | tabe + imasu |
| yom + ru       | tabe + ru    |
| yom + reba     | tabe + reba  |
| yom + yoo      | tabe + yoo   |

<未来時制を選択するモーダル>

★ 否定命令の「な」、否定推量の「まい」は、未来時制を意味的に選択するため、TP を補部としなければならない。

(13) a. 太郎は 来年そこに行く

b. 花子は 明日鰯を食べる

(14) a. \*花子は 明日鰯を食べた

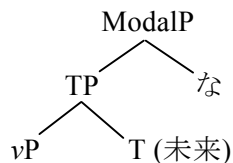
b. \*太郎は 明日気難しい

c. \*私は 来年悲しい

(15) a. 太郎は そこに行くな

b. \*太郎は そこに行ったな

c. \*太郎は 気難しいな



(16) a. 花子は 鰯を食べるな

b. \*花子は 鰯を食べるだろうな

★ 動詞と結合する接辞としての「まい」もある。

- (17) a. 花子は 鰯を食べまい (tabe + umai) vs. 花子は 鰯を食べるまい  
 b. 太郎は そこに行くまい (ik + umai)

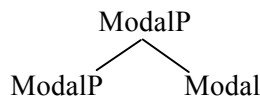
<時制を選択するモーダル>

★ 推量の「だろう、でしょう」は、意味的に時制を選択する。

- (18) a. 太郎は それを食べただろう (tabe + ta daroo)  
 b. その冬は 寒いだろう (samu + i daroo)
- (19) a. \*太郎は それを食べだろう (tabe + daroo)  
 b. \*その冬は 寒だろう (samu + daroo)  
 (cf. その冬は 寒かろう (samu + karoo))

<結論>

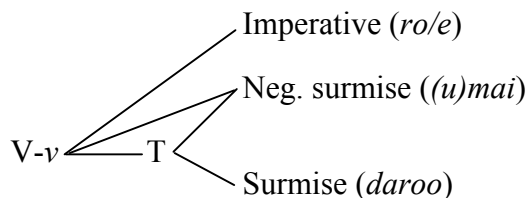
★ (6) にリストしたモーダルは、すべて動詞に結合する接辞であるか、時制 (一般または未来) を意味的に選択する。よって、以下の構造は許容されない。



★ 上田 (2007) は、(6) の要素を、相補分布をなすことから同一の範疇に属するとしているが、この議論には疑問の余地がある。以下に見るように、補文標識の「の」や談話的終助詞の「わ」も時制を選択し、(6) の要素と相補分布をなす。

- (20) a. Mary is likely [ *t* to be the winner ]  
 b. Mary seems [ *t* to be the winner ]

★ 句構造は、形態的な要請や意味的选择制限を満たさなければならない。その結果として、要素間の相補分布が導かれる。( ← 裸句構造理論)



## 2.2. 補文標識の階層

★ 日本語には、「の、か、と」という補文標識があり、(22) が示すように共起しうる。

- (21) a. 太郎は [<sub>CP</sub> 花子が そこにいる の] を知っていた

- b. 太郎は [CP 花子が その本を持っている か] 知りたがっている  
 c. 太郎は [CP 花子が その本を持っている と] 思っている

(22) 太郎は [CP 彼の妹が そこにいた (の) か (と)] みんなに尋ねた (= (1))

< Saito (2012) の分析 >

(23) [CP ... [CP ... [CP ... Finite (の)] Force (か)] Report (と)]

- (24) a. [CP ... [CP ... [CP ... [CP ... Finite (の)] Topic\*] Force (か)] Report (と)]  
 b. [CP Force [CP Topic\* [CP Focus [CP Topic\* [CP Finite ...] ...] ...] ...] ...] (Rizzi 1997)

★ このような階層は、説明されるべき対象であり、説明そのものではない。(← 裸句構造理論)

- (25) a. のか、かと、のかと  
 b. \*とか、かの、との、とかの、かとの、かのと、のとか、とのか  
 c. \*のと

(26) \*太郎は [CP 彼の妹が そこにいる の と] 期待した

★ なぜ、(23) の階層性が観察されるのだろうか。なぜ、(26) は非文法的なのだろうか。

< 「と」 の性質 >

- (27) a. 花子が「私は天才だ」と言ったこと  
 b. 花子が [CP 自分が天才だと] 言ったこと

★ 「と」 は、英語の *that* と同様に、命題文を埋め込む補文標識であると広く仮定されている。

- (28) a. John thinks [CP that [TP Mary is a genius]]  
 b. 太郎は [CP [TP 花子が 天才だ] と] 思っている

- (29) a. Mary said [CP that [TP John is a fool]]  
 b. 花子は [CP [TP 太郎は ばかだ] と] 言った

★ しかし、「と」 は直接引用の言い換えを埋め込む補文標識であると考えられる。すなわち、Plann (1982) の *que* の分析をそのまま適用しうる。

- (30) a. Sabía [CP que [TP coria]]  
 knew(3sg.) *que* run(3sg.)  
 ‘He knew that he was running’  
 b. Te preguntan [CP que [CP para qué [TP quieres el préstamo]]]  
 you ask(3pl.) *que* for what want(2sg.) the loan  
 ‘They ask you what you want the loan for’

- c. Pensó [CP que [CP cuáles [TP serían adecuados]]]  
 thought(3sg.) *que* which ones would be appropriate  
 ‘He wondered which ones would be appropriate’

- (31) Ya supieron/entendieron/recordaron [CP (\*que) [CP por qué  
 already found-out(3pl.)/understood(3pl.)/remember(3pl.) *que* why  
 [TP lo habías hecho]]  
 it had(2sg.) done  
 ‘They already found out/understood/remembered why you had done it’

★ *que* + wh を許容するのは、‘verbs of saying and thinking’ (直接引用と共起できる動詞) のみである。

★ 日本語では、‘verbs of saying and thinking’ のみが「と」を選択する。従って、*que* とは異なり、「と」は、直接引用および直接引用の言い換えに特化した補文標識である。

- (32) a. 太郎が [CP 花子が 彼の家にいるか(と)] 尋ねたこと  
 b. 太郎が [CP 花子が 彼の家にいるか(\*と)] 知りたがっていたこと
- (33) a. John regrets [CP that [TP he went there]]  
 b. \*太郎は [CP [TP そこに行った] と] 後悔した  
 c. 太郎は [CP [TP そこに行った] の] を後悔した

- (34) 「と」を選択する主文動詞

思う、考える、信じる、言う、叫ぶ、主張する、尋ねる、期待する、確信する、感じる

★ スペイン語の *que* と同様に、「と」は、様々な種類の文を補部にとることができる。Rivero が指摘するように、これは Plann の分析を支持するさらなる証拠となる。

- (35) a. Dijo *que* a no molestarle (Rivero 1994)  
 said (3sg.) *que* to not bother-him  
 ‘He said not to bother him’  
 b. Dijo, “A no molestarme!”  
 said (3sg.) to not bother-me  
 ‘He said, “Don’t bother me!”’
- (36) a. 太郎は [CP 花子が 彼の家に来るか] 次郎に尋ねた  
 b. 花子は 太郎に [CP 彼女の家にいると] 命じた  
 c. 花子は 太郎に [CP 彼女の家に行くなど] 命じた  
 d. 花子は 太郎に [CP 彼女の家に来てくれと] 頼んだ (cf. Kuno 1988)  
 e. 花子は 太郎を [CP 彼女の家に行こうと] 誘った

< 「の」の性質 >

(37) 太郎は [CP 花子が そこにいるの] を知っていた (cf. (30a))

(38) 「の」を選択する主文動詞

忘れる、後悔する、見る、待つ、ためらう、拒否する、受け入れる、期待する、確認する、感じる

★ 「の」を主要部とする CP は、事象や行為、すなわち、命題を表す。ただし、命題を表す文は常に「の」の補部に生起できるわけではない。「の」は意味的に時制を選択する。従って、「の」は Finite であると考えられる。(松本 2010)

(39) a. 雨が降るだろうか

b. 太郎は [CP 雨が降るだろうと] 思った

(40) a. 太郎は [CP 雨が降るの] を期待した

b. \*太郎は [CP 雨が降るだろうの] を期待した

(41) a. 太郎は [CP 雨が降るの] を予想した

b. \*太郎は [CP 雨が降るまいの] を予想した

< 「か」の性質 >

★ 「か」は、命題を表す文を補部にとり、疑問文を作る。

(42) a. 太郎は [CP 花子が そこに行ったか] 知りたがっている

b. 太郎は [CP 花子が そこに行くだろうか] 知りたがっている

c. 太郎は [CP 花子が そこに行ったのか] 知りたがっている

(43) \*太郎は [CP 花子が そこに行けか] 知りたがっている

< 補文標識の階層性の説明 >

(44) [CP ... [CP ... [CP ... Finite (の)] Force (か)] Report (と)]

★ 「の」は、意味的に時制を選択する。従って、階層の最下位に位置する。

★ 「のか」 ... 「の」は、命題の補文標識である。「か」は、命題文を補部にとる。

★ 「か」と ... 「と」は、直接引用の言い換えを埋め込む。言い換えられる直接引用は、疑問文でありうる。

★ 「\*とか」 ... 「... と」は、直接引用の言い換えを表し、命題文とは解釈できない。

★ 「\*のと」 ... 「... の」は、命題(事象、行為)を表し、直接引用の言い換えではありえない。

(意味的整合性の欠如、この分析の帰結については、第3節でとりあげる。)





- (53) a. [TP 私はそこに行く/行った]わ  
 b. [TP 太郎はやさしい/やさしかった]わ
- (54) a. \*[ModalP 花子は来るだろう]わ  
 b. \*[ForceP 花子は出席しなさい]わ
- (55) a. \*[FiniteP 太郎はそこに行くの]わ  
 b. \*[ForceP だれがそこに行くか]わ  
 (cf. [CP だれがそこに行くか]よ、[CP だれがそこに行くか]な)

★「よ、ね、な」には、選択制限がない。

- (56) a. 太郎はそこにいる/いたよ (TP)  
 b. 太郎はやさしい/やさしかったよ
- (57) a. 太郎はそこに行け/行きなさいよ (ModalP)  
 b. そこに行こう/行きましょうよ
- (58) a. 花子がそこにいるのよ (CP)  
 b. 花子はそこにいるわよ (Speech-ActP)
- (59) a. 太郎がそこにいる/いたね (TP)  
 b. 太郎はやさしい/やさしかったね
- (60) a. 太郎はそこに行きなさいね (ModalP)  
 b. そこに行きましょね
- (61) a. 花子がそこにいるのね (CP)  
 b. 花子はそこにいるわね (Speech-ActP)
- (62) a. 太郎がね、そこにね、いてね、それでね、...  
 b. \*太郎がわ、そこにわ、いてわ、それでわ、...

★「よ」は、主張の内容を表す文に後続し、主張の言語行為を示す。一方、「ね、な」は、会話参加者の返答を促す。

- (63) a. [CP だれがそこに行くか]よ  
 b. [CP 太郎に何ができるか]よ
- (64) a. [CP だれがそこに行くか]ね  
 b. [CP 太郎に何ができるか]ね

★なぜ、「よね」、「よな」は許容され、「\*ねよ」、「\*なよ」は許容されないのだろうか。言語行為の整合性が問題となる。

- (65) a. 太郎はやさしいよね  
b. \*太郎はやさしいねよ

- (66) a. I am telling you that John is kind. What do you think?  
b. \*I am telling you: do you agree with me that John is kind?

★「わ-よ-ね/な」。最後に、なぜ、「ね」と「な」は共起しないのだろうか。遠藤 (2010) の観察に基づいて考察する。

- (67) a. \*花子はそこにいるねな  
b. \*花子はそこにいるなね

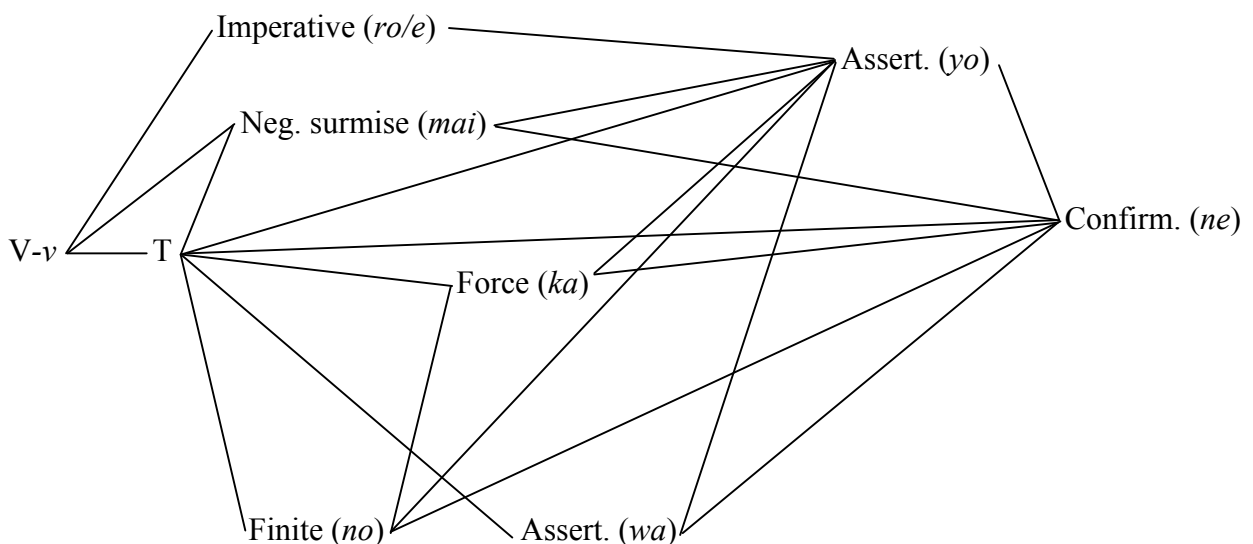
- (68) a. 出かけたな (独り言 OK)  
b. 出かけたね (独り言 X)

★「な」は、話者を含む会話参加者から返答を求める。一方、「ね」は、話者を除く会話参加者から返答を求める。従って、「ね」と「の」が示す言語行為は矛盾する。

- (69) モーダル：命題を表す補部をとる。多くは形態的理由で *vP* を補部とし、残りは時制を選択する。ここから、モーダルの共起制限が導かれる。

- (70) 補文標識：「の」は、時制を選択し、命題を表す補文を形成する。「か」は、命題を表す補部を取り、疑問文を形成する。「と」は、直接引用の言い換えを示す補文標識である。帰結として、「の-か-と」という階層性が導かれる。

- (71) 談話終助詞：「わ」は、時制を選択し、主張を示す。「よ、ね、な」には、選択制限がない。「よ」は主張を示し、「ね」は話者を除く会話参加者、「な」は話者を含む会話参加者の返答を促す。以上から、「わ-よ-ね/な」という階層が予測される。



### 3. 補文の意味分析と補文標識の比較統語論

(72) [CP... [CP... [CP... Finite (の)] Force (か)] Report (と)] (= (44))

- ★「の」は、意味的に時制を選択する。従って、階層の最下位に位置する。
- ★「のか」...「の」は、命題の補文標識である。「か」は、命題文を補部にとる。
- ★「かと」...「と」は、直接引用の言い換えを埋め込む。言い換えられる直接引用は、疑問文でありうる。
- ★「\*とか」...「...と」は、直接引用の言い換えを表し、命題文とは解釈できない。
- ★「\*のと」...「...の」は、命題(事象、行為)を表し、直接引用の言い換えではありえない。

直接引用の言い換えと命題(事象、行為)は、どのように異なるのだろうか。本節では、「\*とか」、「\*のと」のより正確な分析を試み、その帰結を追究する。

#### 3.1. Davidson の意味理論と日本語補文標識の階層

<Frege (1892) の指示対象と意義>

- (73) a. The Morning Star is the Morning Star  
b. The Morning Star is the Evening Star
- (74) a. John believes that the Morning Star is bigger than the Earth  
b. John believes that the Evening Star is bigger than the Earth
- (75) Mary believes that John saw a unicorn  $\rightarrow \exists x [x \text{ is a unicorn}]$

<命題と可能世界の論理学> (Montague 1973 他)

- (76) 意義 ...  $f: \{\text{可能世界}\} \rightarrow \{\text{指示対象}\}$
- (77) a. 太郎は [CP 花子が麒麟を見た] 思っている  
b. 太郎は [CP 麒麟が現れるの] を期待した
- (78) a. 花子は [CP 明けの明星が現れるの] を期待した  
b. 花子は [CP 宵の明星が現れるの] を期待した
- (79) a. 太郎は [CP 明けの明星が地球よりも大きい] 思っている  
b. 太郎は [CP 宵の明星が地球よりも大きい] 思っている

<Davidson (1967) の事象論理学>

- (80) a. John opened the door with the key  
b.  $\exists e [\text{opened (e) \& by (e, John) \& of (e, the door) \& with (e, the key)}]$

★ (80a) は、'John opened the door' を含意する。

(81)  $\exists e_1$  [expected ( $e_1$ ) & by ( $e_1$ , Hanako) & of ( $e_1$ ,  $e_2$ ) & [appear ( $e_2$ ) & of ( $e_2$ , the Morning Star)]]

★ Higginbotham (1983) の知覚文の分析

(82) a. John saw Mary hit Bill

b. [ $\exists e$ : hit ( $e$ ) & by ( $e$ , Mary) & of ( $e$ , Bill)] John saw  $e$

c.  $\exists e_1$  [saw ( $e_1$ ) & by ( $e_1$ , John) & of ( $e_1$ ,  $e_2$ ) & [hit ( $e_2$ ) & by ( $e_2$ , Mary) & of ( $e_2$ , Bill)]]

<Davidson (1968-69) "On Saying That">

(83) a. Barbarella said that she is hungry

b.  $\exists u$  [said (Barbarella,  $u$ ) & SS ( $u$ , that)] [She is hungry]

c.  $\exists e$  [said ( $e$ ) & by ( $e$ , Barbarella) &  $\exists u$  [of ( $e$ ,  $u$ ) & SS ( $u$ , that)]] [She is hungry]

★ SS (same-saying relation) は、Plann (1982) の「言い換え」と同義であると考えられる。

(84) Galileo said that the Earth moves

★ Lahiri (1991) は、*que* が疑問文を補部にとることができる事実が、この分析を支持する証拠となることを指摘する。

(85) a. 太郎は [<sub>CP</sub> だれが笑ったかと] 訊いた / 言った

b.  $\exists u$  [said (Taroo,  $u$ ) & SS ( $u$ , that)]. [Who laughed?]

<日本語補文の意味分析>

★ 日本語は、事象と「発話」に基づく Davidson の理論を支持する直接的な証拠を提示する。

(86) a. GG says that Kagawa will return to Bundesliga

b. GG は [<sub>CP</sub> 香川がブンダスリーガに戻るだろうと] 言っている

c.  $\exists u$  [say (GG,  $u$ ) & SS ( $u$ , that)]. [Kagawa will return to Bundesliga]

(87) a. GG regrets that Kagawa left Bundesliga

b. GG は [<sub>CP</sub> 香川がブンダスリーガを去ったの] 残念に思っている

c. regret (GG,  $e$ ) & [left ( $e$ ) & by ( $e$ , Kagawa) & of ( $e$ , Bundesliga)]

<「のか」、「かと」がなぜ許容されるのか>

★ 疑問文は、命題を表す文、すなわち真偽値を有する文から形成される。(Hamblin 1973, Karttunen 1977) 「の」を主要部とする事象文は、この条件を満たす。

- (88) a. John laughed ...  $\exists e$  [laughed (e) & by (e, John)]  
 b. Who laughed  
 c.  $\{\exists e$  [laughed (e) & by (e, John)],  $\exists e$  [laughed (e) & by (e, Mary)], ...}
- (89) a. 太郎は [<sub>CP</sub> [<sub>CP</sub> 花子がだれを殴ったの] か] 知っている  
 b.  $\{\exists e$  [hit (e) & by (e, Hanako) & of (e, John)],  $\exists e$  [hit (e) & by (e, Hanako) & of (e, Bill)], ...}
- (90) a. 太郎は [<sub>CP</sub> [<sub>CP</sub> 花子がだれを殴ったか] と] 尋ねた  
 b.  $\exists u$  [ask (Taroo, u) & SS (u, that)]. [Who did Hanako hit?]

< 「\*のと」、「\*との」、「\*とか」の不適格性について >

- (91) \*太郎は [<sub>CP</sub> 彼の妹がそこにいる のと] 期待した (= (26))

★ ‘[<sub>CP</sub> ... の]’ は、事象を指示対象とする。「発話」あるいは「発話の言い換え」とは解釈しえない。

- (92) \*太郎は [<sub>CP</sub> 彼の妹がそこにいる との] を期待した

★ 「の」の補部は、事象の内容を表す。「発話」あるいは「発話の言い換え」はこの機能を果たさない。

- (93) \*太郎は [<sub>CP</sub> 彼の妹がそこにいる とか] 尋ねた

★ 「か」は、真偽値を有する文を補部にとり、疑問文を形成する。「発話」あるいは「発話の言い換え」は真偽値を有しない。

### 3.2. 分析から生起する諸問題：指示的不透明性および英語 *that* の分析

★ 事象と発話は、意味の異なる基礎概念として認められなければならない。日本語における「の」と「と」の区別は、この主張を裏付ける根拠となる。

★ Davidson の ‘same-saying relation’、Plann の「言い換え」は、より正確に定義されなければならない。ここで、可能世界の論理学あるいは Larson and Ludlow (1993) の ‘interpreted logical form’ が考慮されなければならない。

★ 本論の結論は、事象がこの問題とは区別されて分析されるべきであることを示唆する。(ただし、指示的不透明性については、類似するメカニズムが必要になる可能性はある。)

- (94) a. John said/thought that Mary observed the Evening Star (Frege 1892)  
 b. John said/thought that Mary observed Venus

- (95) 太郎は [<sub>CP</sub> 花子が宵の明星を観察したと] 思っている

- (96) a. Mary waited for the Evening Star to appear in the sky  
 b. Mary waited for the Venus to appear in the sky
- (97) 花子は [CP 宵の明星が空に現れるの] を待った

<Higginbotham (1983) の知覚文分析の再考>

- (98) a. John saw Mary hit Bill (= (82))  
 b. [∃e: hit (e) & by (e, Mary) & of (e, Bill)] John saw e
- (99) a. 花子は [CP 宵の明星が空に現れるの] を目撃した  
 b. 花子は [CP 金星が空に現れるの] を目撃した
- (100) a. 花子は [CP 宵の明星が空に現れるの] を期待した  
 b. 花子は [CP 金星が空に現れるの] を期待した

★ (98a)、(99) の指示的透明性は、(101) と同様であり (Higginbotham 1983)、(100) の指示的不透明性は、(102) と同様である。(外延性動詞 vs. 内包性動詞)

- (101) a. John saw the event / a unicorn / the Evening Star  
 b. 花子は その出来事 / 麒麟を / 宵の明星を目撃した
- (102) a. John expected a unicorn / the Evening Star (to appear)  
 b. 花子は 麒麟を (麒麟が現れるのを) 期待した  
 (cf. Larson (2014))

★ 目的語の特定性も関連する。例えば、*see* は特定の事物、事象を選択する。この点において、「夢を見る」、「幻覚を見る」等の表現は興味深い。

<Factivity について>

★ Kuno (1973) は、「の」を主要部とする CP は、それが真であることが前提とされる ‘factive complement’ であるとする。(103) はこれを裏付けるが、(104) は反例となる。

- (103) a. 太郎は [CP そこに言ったの] を後悔した  
 b. 太郎は [CP 花子が行ったの] を忘れていた
- (104) a. 太郎は [CP そこに行くの] を拒否した  
 b. 太郎は [CP 花子が来るの] を待った

★ より正確には、‘factive verb’ は常に「の」を主要部とする CP を補部にとる。これは、真偽値を有するのは「の」を主要部とする CP であることから説明される。そうであれば、‘factive verb’ とは、事象を目的語として選択する外延性他動詞に他ならない。

- (105) a. Mary regrets that she saw Bill  
 b. [ $\exists e$ : saw (e) & by (e, Mary) & of (e, Bill)] Mary regrets e
- (106) a. John forgot that Mary went to London  
 b. [ $\exists e$ : went (e) & by (e, Mary) & to (e, London)] John forgot e
- (107) a. John forgot (the fact) that Mary went to London (Kiparsky and Kiparsky 1970)  
 b. John forgot (the event) that Mary went to London

< That の曖昧性 >

★ Saito (2012) では、英語には Report がなく、that は Finite であるとした。(cf. Rizzi 1997) しかし、上記の意味分析に基づけば、この仮説は維持することができない。

- (108) a. Barbarella said that she is hungry  
 b.  $\exists u$  [said (Barbarella, u) & SS (u, that)] [She is hungry]

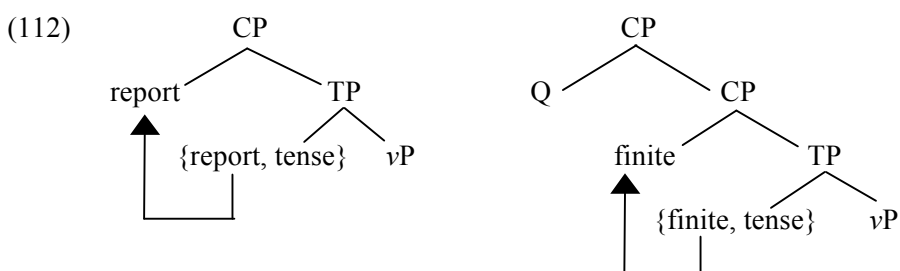
★ (108a) の that は、Report である。結果として、なぜ that が疑問文を補部にとることができないかが、問題となる。

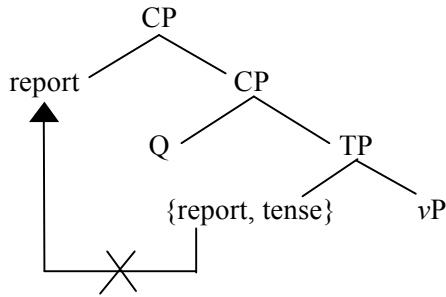
- (109) a. \*He thought that which ones would be appropriate  
 b. Pensó que cuáles serían adecuados  
 thought(3sg.) that which ones would be appropriate  
 ‘He wondered which ones would be appropriate’

★ この問題については、以下の可能性が考えられる。(C の主要部移動については、Rizzi 1997 を参照されたい。)

- (110) a. *that/que*: {finite}, {report}  
 b. の: {finite}, と: {report}, か: {Q}

- (111) a. スペイン語、英語においては、最上位の C が音声化される。(cf. Villa-Garcia 2012)  
 b. {finite} は、{finite, T} として、派生に入る。  
 c. 英語においては、report も T と素性集合を形成する。





- (113) a. I know that Mary ate pizza  
 b. \*I know to eat pizza

- (114) a. I know how Mary ate pizza  
 b. I know how to eat pizza (Thanks to Howard Lasnik for the generalization.)

#### 4. 結論

★ 裸句構造理論を仮定する限り、共起制限や階層性といった現象には、独立した説明が与えられなければならない。

- (115) a. モーダルの共起制限は、形態的選択、意味的選択によって説明しうる。  
 b. 補文標識の階層性は、意味的選択および意味の整合性に帰することができる。  
 c. 談話的小辞の階層性は、意味的選択および発話行為の整合性による。

★ 補文標識の階層性は、「発話」あるいは「発話の言い換え」と事象が意味的に区別されることを含意する。従って、Davidson の論理形式を支持するものである。

- (116) a. John opened the door with the key (= (4))  
 b.  $\exists e$  [opened (e) & by (e, John) & of (e, the door) & with (e, the key)]

- (117) a. Barbarella said that she is hungry (= (5))  
 b.  $\exists u$  [said (Barbarella, u) & SS (u, that)] [She is hungry]

★ Davidson の意味分析を適用することにより、様々な帰結が導かれ、また興味深い問題も明らかになる。

- (118) a. 事象を表す補部の指示的不透明性は、主文動詞の内包性によるのではないか。  
 b. 'Factive verb' は、事象を目的語として選択する外延性他動詞として分析できるのではないか。

- (119) 英語 *that* が疑問文を補部にとることができないことについては、統語的分析が必要となる。



<補遺：主題の分布>

★ 久野 (1973) : 主題／対照、総記／叙述

- (120) a. 花子はその本を読んでいた (叙述)  
 b. 花子はその本が好きだ (総記)

★ 文の述部が状態または普遍的・習慣的動作を表わす場合には、文頭の主格名詞句が総記の解釈を受ける。(p. 41、簡略バージョン)

- (121) 太郎が [NP[TP 花子が好きだ] 本] を買った (こと) (文頭 = 主文の文頭)

- (122) a. 太郎はその本を読んだ (主題、対照)  
 b. 太郎はその本は読んだ (対照) vs. その本は太郎が読んだ (主題、対照)

★ 文頭の「XP+は」のみが主題の解釈を受けることができる。

- (123) 太郎が [NP[TP 花子は好きだ] 本] を買った (こと) (文頭 = 主文の文頭)

★ Heycock (1994, 2008) : 総記や主題は主文現象であり、統語構造ではなく、情報構造に基づいて説明されるべきである。

- (124) Credo che a Gianni, QUESTO, domani, gli dovremmo dire  
 I believe that to Gianni this tomorrow we should say  
 ‘I believe that we should say this to Gianni tomorrow’

- (125) a. 太郎が [CP[TP 花子はその本が好きだ] の] を忘れていたこと  
 b. 太郎が [CP[TP 花子はその本が好きだ] と] 信じていること

★ しかし、主題は、本当に主文現象なのだろうか。関係節の TP には生じないが、「と」を伴う補文内には表れるようである。(Heycock 2008 他)

- (126) a. 太郎が [CP[TP 花子は自分の家に来る] と] 信じていること (主題、対照)  
 b. 太郎が [CP[TP 花子は自分の家にいた] と] 言ったこと (主題、対照)

- (127) [... [TopicP 主題 [Topic' [TP ...] Topic]] Report (to)]

- (128) a. 太郎が [CP[TP 花子は自分の家に来る] の] を忘れていたこと (対照)  
 b. 太郎が [CP[TP 花子は自分の家に入る] の] を見たこと (対照)

- (129) a. 太郎が [CP[TP 花子は自分の本を買った] か] 尋ねたこと (主題、対照)  
 b. 太郎が [CP[CP[TP 花子は自分の家に来る] の] か] 知りたがっていること (主題、対照)

- (130) [CP ... [CP ... [CP 主題 [C' [CP[TP ...] Finite (no)] Topic]] Force (ka)] Report (to)]

★ (130) の構造により、主題の分布が正しく予測される。さらに、久野 (1973) の一般化に反して、複数の主題が同一文内に共起できることを、Kuroda (1988) が指摘している。

(131) 花子は (去年) テルアビブへは行った (主題、対照 + 対照)

(132) テルアビブへは 花子は (去年) 行った (主題、対照 + 主題、対照)

(133) a. [ ... Force [ ... (Topic\*) [ ... (Focus) [ ... (Topic\*) [ ... Finite [TP ... ] ] ] ] ] ] (Rizzi 1997)

b. [ ... Report [ ... Force [ ... (Topic\*) [ ... Finite [TP ... ] ] ] ] ] ... 日本語

## 参照文献

- Chomsky, N. (1994) “Bare Phrase Structure,” in G. Webelhuth (ed.), *Government and Binding Theory and the Minimalist Program*, Oxford: Blackwell, 383-439.
- Chomsky, N. (1995) *The Minimalist Program*, Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Cinque, G. (1999) *Adverbs and Functional Heads: A Cross-linguistic Perspective*, Oxford: Oxford University Press.
- Davidson, D. (1967) “The Logical Form of Action Sentences,” reprinted in D. Davidson, *Essay on Actions and Events*, 1980, Oxford: Oxford University Press, 105-122.
- Davidson, D. (1968-69) “On Saying That,” *Synthese* 19: 130-146.
- 遠藤善雄 (2010) 「終助詞のカートグラフィー」、長谷川信子編『統語論の新展開と日本語研究 — 命題を超えて』、開拓社、東京、67-94.
- Frege, G. (1892) “On Sense and Reference,” English translation in P. Geach and M. Black (eds.), *Gottlob Frege, Philosophical Writings*, New York: Philosophical Library, 56-78, 1952.
- Grewendorf, G. and C. Poletto (2009) “The Hybrid Complementizer System of Cimbrian,” in V. Moscati and E. Servidio (eds.), *Studies in Linguistics Vol.3: Proceedings XXXV Incontro di Grammatica Generativa*, Centro Interdipartimentale di Studi Cognitivi sul Linguaggio, Università di Siena, 181-194.
- Hamblin, C. L. (1973) “Questions in Montague English,” *Foundations of Language* 10: 41-53.
- Haraguchi, T. (2012) “Distributions of Modals and Sentence Final Particles: Selection or Something Else?”, Unpublished ms., Nanzan University.
- Higginbotham, J. (1983) “The Logic of Perceptual Reports: An Extensional Alternative to Situation Semantics,” *Journal of Philosophy* 80: 100-127.
- Higginbotham, J. (1986) “Linguistic Theory and Davidson’s Program in Semantics,” in E. Lapore, ed., *Truth and Interpretation: Perspectives on the Philosophy of Donald Davidson*, Oxford: Blackwell, 29-48.
- Karttunen, L. (1977) “Syntax and Semantics of Questions,” *Linguistics and Philosophy* 1: 3-44.
- Kuno, S. (1973) *The Structure of the Japanese Language*, Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Kuno, S. (1988) “Blended Quasi-Direct Discourse in Japanese,” in W. Poser (ed.), *Papers from the Second International Workshop on Japanese Syntax*, Stanford: CSLI Publications, 75-102.
- Kuroda, S.-Y. (1965) *Generative Grammatical Studies in the Japanese Language*, Ph.D. dissertation, MIT.

- Kuroda, S.-Y. (1983) “What Can Japanese Say about Government and Binding?”, *WCCFL* 2: 153-164.
- Lahiri, Utpal (1991) *Embedded Interrogatives and Predicates that Embed Them*, Ph.D. dissertation, MIT.
- Larson, R. (2002) “The Grammar of Intensionality,” in G. Preyer and G. Peter (eds.), *Logical Form and Language*, Oxford: Oxford University Press, 228-262.
- Larson, R. and P. Ludlow (1993) “Interpreted Logical Form,” *Synthese* 95: 305-355.
- 松本恵理 (2010) 「日本語における引用表現と補文構造」、卒業論文、南山大学人類文化学科。
- Montague, R. (1973) “The Proper Treatment of Quantification in Ordinary English,” in K.J.J. Hintikka, J.M.E. Moravcsik and P. Suppes (eds.) *Approaches to Natural Language*, Dordrecht: Reidel, 221-242.
- Plann, S. (1982) “Indirect Questions in Spanish,” *Linguistic Inquiry* 13: 297-312.
- Rivero, M.-L. (1994) “On Indirect Questions, Commands, and Spanish Quotative *Que*,” *Linguistic Inquiry* 25: 547-554.
- Rizzi, L. (1997) “The Fine Structure of the Left Periphery,” in L. Haegeman, ed., *Elements of Grammar*, Dordrecht: Kluwer Academic Publishers, 281-337.
- Saito, M. (2012) “Sentence Types and the Japanese Right Periphery,” in G. Grewendorf and T. E. Zimmermann, eds., *Discourse and Grammar*, Berlin: Walter de Gruyter, 147-175.
- 斎藤 衛 (2013) 「日本語埋め込み文の意味的・談話的性質—比較統語論への招待」、池内正幸, 郷路拓也編『生成言語研究の現在』、ひつじ書房、東京、221-251.
- Saito, M. and T. Haraguchi (2012) “Deriving the Cartography of the Japanese Right Periphery: The Case of Sentence-Final Discourse Particles,” *Iberia* 4.2: 104-123.
- Tenny, C. (2006) “Evidentiality, Experiencers and the Syntax of Sentience in Japanese,” *Journal of East Asian Linguistics* 15: 195-244.
- 上田由紀子 (2007) 「日本語のモダリティの統語構造と人称制限」、長谷川信子編『日本語の主文現象—統語構造とモダリティ』、ひつじ書房、東京、261-294.
- Villa-García, J. (2012) *The Spanish Complementizer System: Consequences for the Syntax of Dislocations and Subjects, Locality of Movement, and Clausal Structure*, Ph.D. dissertation, University of Connecticut.